京都教区時報

Home Page http：//www.kyoto.catholic.jp　4345

京都教区広報委員会
編集長　村上透磨
京都市中京区
河原町通三条上る
TEL 075－211－3468
FAX 075－211－4345
kouhou@kyoto.catholic.jp

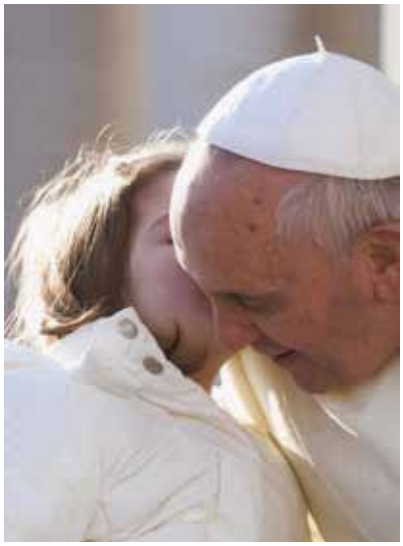
3頁　こんにちは神父さん（中川 博道神父／窄口 松雄神父）
4頁～5頁　2016年比叡山宗教サミット「世界平和祈りの集い」
京都教区　青年による平和への思いの作文

点訳版「京都教区時報」〈無料〉ご希望の方は点訳ネット「レジナ」代表嶽崎(たけざき)裕子さんまでお申込みください。
TEL・FAX 079－431-8601

2016年　司教年頭書簡　御父のように、いつくしみ深く

5．ゆるしの道具になりなさい
6．あわれみ深い人は幸い

少し大きなテーマになりますが、二つのテーマを一緒に考えてみたいと思います。と言いますのは、神の憐みとゆるしは、ほとんど同義のように語られるからです。もっとも、そのニュアンスは少し違うでしょう。「ゆるし」は罪を連想させますし「あわれみ」は、人間存在の惨さ（ミゼール）を想わせるでしょう。でも、罪にせよ人間の存在の貧しさにせよ、そこに揺らぐ神（の愛）に触れるということには違いありません（神の「シンパシー」＝「神の共感・共振する愛（なさけ）」をさします）。



先月号で、ヘブライ書による、神の大祭司キリストの憐みについて黙想しました。そこでは特に、キリストの十字架のあがないによる、神からの憐みの意味が語られました。今回は、私たちがその神からの憐みを効果的な「しるし」「道具」「証し」となるように招かれている事に、気付かせようとされているように思えます。

ところでどうでしょう。私たちは、この呼びかけを聞いて「さあ、ゆるしの道具にならねば」「あわれみ深い人にならねば」と身構えます。ある程度の自信をもって、勇気をもって、熱意とほこりをもって、例えば「さあ人をゆるしてあげねばならない」とはりきって……。

でも、ちょっと思うのです。「あれ、そうかな？」って、そこで、司教が引用している聖書の箇所を読み直してみます。「7の70倍ゆるせ」というたとえ話（マタイ18・21～）こんなこと普通の人間、特に自分のような者には、到底

9
2016

出来ない。神なら出来る。その神の愛があれば100分の1ぐらいにはゆるせるかも知れない。そこで、少しは勇気もわいてくる。すると、このたとえは神の愛はこんなに大きく、その憐みはもはや、はかりしれず、限りないゆるしに満ちていると言おうとしている。そして、その神の愛に気づいたら何か出来る。やってごらんとはげまして下さる。

次に、エフェソ書です（4・32）。

罪がゆるされ、新しい「いのち」に生きるものとして「互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストにおいてあなた方を赦してくださったように、赦し合いなさい」という言葉です。

ここで見逃し易い言葉は「キリストにおいて」ということです。神の憐みは、キリストにおいて示されている。これを聞き落すと憐みの業は単なる、隣人愛に留まってしまう。更に、この箇所は、4・30〜5・4にひろげて読むことをお勧めします。すると、この聖書の引用の深みが分かってきます。

「憐み深い人は幸い」（マタイ5・7）も、この憐み深い方がまず神であると、司教が言っておられることにも注目したいと思います。そうでないと、それは単なる人道的な勧告になってしまう。ただ、人を本当に愛することが出来るのは、神の無条件の愛に気付き、神に愛された人であると言っているのです（参照ルカ6・36「6・27〜38」）。

また、この「憐み深い人は幸いである」は、「義に飢え渇く人は幸い」（マタイ5・6）と対応するものであることを、知っておくのもよいと思われます。ここでの「神の義」は「神の憐れみ」と同意語であるということです。つまり、「神の義」は救いとなってあらわれ、「憐れみ」は「罪のゆるし」となって、あらわれることになるからです。

さて、次の言葉は、はっとさせられます。「これは、憐れみを受けている人は、憐れみを受けているから幸いなのではありません。憐れみ深くあろうとする幸いをいっているのです」さらに「神は私たちが憐れみの業をするから、憐れまれるのではなくて、神が憐れんでくださるから、隣人を愛することが出来るのです」という言葉です。

最後に、一ヨハネ3・17をもって、このテーマは結ばれますが、ここもその一ヨハネ3・11〜4・21の文脈の中で読みましょう。

「行いをもって、誠実に愛する」ことが出来るのは、神が愛であり、その無償の愛が差別なく、すべての人を包んでいる、その自覚から始まるのです。

（村上 透磨）

こんにちは神父さん

中川 博道神父

所属　カルメル修道会
生年　1949年
叙階　1984年

京都教区の皆さんの上に、主の平和がありますように。

わたしは2014年春に宇治修道院に戻ってきました。2002年まで10年間同じ修道院にいて、京都教区でお世話になっていました。その後２ヶ所を移動して、12年ぶりの宇治です。

今は、宇治黙想の家で黙想の同伴や、聖母短期大学で「キリスト教学」の講座を持たせていただき、若者たちとの時間をいただいています。また、北九州地区、広島教区内のカルメル在世会の人たちの同伴を定期的に行っています。ほかに黙想会、講演会などで旅をする機会の多い日々を過ごしています。様々な場を訪れ、多くの人々と出会いながら、日本社会の変化と、教会や様々な修道会が大きく変貌していっていることを感じます。このような時期には、まず注意深く主に聴きながら歩むことの大切さを痛感しています。

京都教区の皆さんの日々が、「主の平和」のうちにありますように、心からお祈りしております。

窄口 松雄神父

所属　カルメル修道会
生年　1951年
叙階　1992年

はじめまして。と挨拶するのは青年のころから知っている人達には、爺か。もう数十年見ていない。と言われそうですね。関西地区は私にとって第二の故郷です。

長い間、幼稚園と小教区の仕事に支えられていました。今は宇治の修道院です。もう二年半になります。今頃、自己紹介するのは、くすぐったいですね。その幼稚園は宣教の場であることを実感します。説明は省いて、今は私の思いです。

司牧していた、日比野教会（名古屋）は国際的です。多い時、フィリピンの信者が60名以上、ブラジルが100名以上もいたからです。未信者のブラジルの人が、日本で何人も洗礼を受けて帰りました。そのように信者と共に、キリストに出会う実感を体験させる道具となれれば、私は幸いと思っています。同時に、司牧面で、カトリックは面白くないから他宗教へ移る信者がいます。このような事が起きないように、爺にも生きているキリストを紹介できるように、願いつつ。

2016年比叡山宗教サミット「世界平和祈りの集い」

2016年比叡山宗教サミット「世界平和祈りの集い」が8月4日に大津市の延暦寺で行われた。これは、1987年から「比叡山宗教サミット」として毎年行われ、今年で29周年になる。国内外の宗教・宗派を越えて平和への道を探るもので、仏教、キリスト教、イスラム教、神道、教派神道たちが壇上から平和を願って黙祷した。カトリックからは、教皇庁諸宗教対話評議会秘書局員 シスター ジュディットゥ・ゾーベラインとパウロ大塚 喜直司教が参加した。

毎年、青年による平和への思いの作文が各宗教・宗派による輪番制にて登壇し読まれている。今年は、カトリックの番で、高校一年生の土持こなみさんが読まれた。

その作文を紹介します。

教区広報委員会

「やっさんから教わった平和への道の開き方」

高校一年　土持　こなみ

私の学校には、やっさんと呼ばれている現代社会の先生がいます。やっさんは40歳台であることを忘れるほど元気で、よく喋り、明るくて優しくて面白い、生徒に人気の先生です。いつもおちゃらけていて、どたばたと大きな身振りで教壇の上を跳んだり跳ねたり、忙しい先生ですが、そんなやっさんにも一つだけまじめな顔になって真剣に熱弁するときがあります。それは、社会の問題について生徒に説くときです。

例えば、日本における貧困についての話の時は、どんなに頑張っても収入が安定せず苦しむ人の多さを語り、日本経済の危うさを話す時には、不況で借金を抱え自殺したタクシー運転手のことをあげ、この命は救えたはずだと訴え、世界の貧しい子どもたちの話題の時は、ごみ山を裸足で歩く少女の命が、破傷風などの可能性により脅かされていることを、熱を持って弁論します。そのやっさんの様子からは、本当に世の中の問題に真剣に真正面から向き合って、解決しようとしていることがありありと伝わってくるのです。

この熱弁は2回に1回の頻度で授業中に行われ、その度に皆は「始まった。」と言わんばかりに互いに目配せをして、やっさんの演説を聞いています。数あるやっさんの演説の中でも、特に衝撃的だったものがあります。それは、アメリカが引き起こしたイラク戦争の戦闘地域での、あまりに酷い捕虜の扱いについてでした。

イラク戦争では、多くの一般市民が捕虜とされ、アメリカの軍の施設に入れられていました。その中では、拷問にも近い嫌がらせや虐待が行われていたのだ、とやっさんはある本の一節を紹介しました。ある男性は、米兵に胡椒水を両目にうたれて放置され、両目を失明した。多くの女性たちが性的暴行をされた。首から下を地面に埋められ、日中の強い日差しの中放置されて瀕死になった男性がいた。やっさんの口から出る言葉ひとつひ

とつに私は表しようのない感情を覚えました。そういった惨い被害にあった人々が、アメリカや連合軍に復讐するために集まって、武装集団を作ったのだ。「俺は別にアメリカを非難しているわけちゃう。ただ、そういう事実があったことを忘れないでほしいんだ。」と、やっさんは言いました。「憎しみは憎しみをよぶ。復讐は復讐をよぶ。それが、世界の平和への道を妨げているんだ。」そう言ってやっさんは授業を終えました。

やっさんが授業の最後に言った言葉から、昨今の世界で起きている数々の事を思い出しました。欧米を中心に広がるISによるテロの脅威、人種差別的事件、絶えぬ紛争、先日アメリカで起きた事件がまさにその典型的な例といえるでしょう。白人警察官が黒人を射殺する事件がアメリカ国内で頻発する中、数々のこのような事件への恨みを募らせた黒人の男が、白人の警察官を射殺した事件です。これはまさに憎しみの負の連鎖を生み出す行為です。これはまだアメリカ国内におけることですが、いずれこのような事件が国境を越えて起きたりすると、最悪の場合戦争を引き起こしかねません。私はいつになっても見えてこない平和への道に絶望を感じましたが、すぐにその絶望は消えました。とある人のことが頭をよぎったからです。それは、フランスのジャーナリストのアントワンヌ・レリスさんでした。

レリスさんは、昨年十一月に起こったパリの同時多発テロで妻を亡くしました。しかし、悲しみに暮れながらも、テロリストに向けてフェイスブックにメッセージを投稿しました。そのメッセージは、憎しみの言葉ではなく「私はあなたたちを憎まない」といった、まるで逆の言葉でした。彼は1歳5か月の息子の将来のためにも、自ら憎しみの連鎖を断ち切ったのです。それはつまり、自分の中にある、あらゆる悲しみや怒り、憎しみを抑えて否定し、なおかつそれを憎いはずの相手に向けて発信するということで、相当に辛く覚悟のいることだったに違いありません。平和への道のりはここにあるのです。人々が我慢し耐え忍び、悲しみや怒りを乗り越えた先に、平和は実現するのです。勿論、悪を働いたものにはそれ相応の裁きと罰は必要です。しかし、憎しみの余り、犯人やそれに関係する人々を攻撃したり、犯人とは全く関係のない人を、単に同じ職種・宗教・人種だという理由で、攻撃したりしようものなら、それこそ憎しみの連鎖を引き起こし平和を遠ざけてしまうこととなるのです。我慢は人間関係を良好に保つ鍵とは言われますが、国際関係でも同じことが言えるのです。しかし、一度始まった武装組織によるテロや攻撃の連続は、たやすくは終わらないものです。組織自体を制圧するとなると、武力以外での方法でやっても、なかなか制圧しきることはできません。つまり、これ以上このような組織を生み出さないことが重要なのです。

やっさんは私たちに言いました。「この乱れ切った世界を平和に近づけるための方法を考えること。それがこれからの未来を担う君たちの仕事なんだ。」私たちはそのことを心にとめ、責任を持って平和の実現を目指してこれからも生きねばならないのです。

2016年「病者・高齢者訪問講座」

京都いのちの電話の事務局長であり、ロゴセラピストの中瀬真弓氏を講師に招いて、２０１６年度「病者・高齢者訪問講座」の第１回講座（テーマ「聴くことは生かすこと」―傾聴―）が開かれました。

前半は「傾聴」についての講話、後半は、ワークを通してコミュニケーションについて、特に「聴く」ということを学びました。

第１回『聴くことは生かすこと』
―傾聴―

中瀬真弓氏
（京都いのちの電話 事務局長）

効果的なコミュニケーションの五つの要素

傾聴は、コミュニケーションの重要な要素の一つです。他者とのコミュニケーションにおいて何かひずみを感じた時、次の五つの要素に照らしながら、広い視野に立ってどんなひずみがあったのかを振り返ることが助けになります。この作業は自分の対人関係の傾向を知っていくことにもつながります。傾向を知れば工夫ができます。

①肯定的な自己概念…他者との関わりの中で自身を受け入れる
②表現の明確さ…丁寧に気持ちを言葉にしていく
③感情を役立てる…感情に良い悪いも無い感情は、私にどうすればよいかを教えてくれる
④ほどよい自己開示…弊害になっている私に関する情報を素直に伝える
⑤傾聴…目の前の他者に耳を傾け、言葉のうしろにある「何か」を聴く

「人間関係トレーニング」より
ナカニシヤ出版

傾聴とは

傾聴とは、コミュニケーションのやり方ではなくあり方です。ですから正しいやり方があるのではなく、何が善いかは「その時」にしか答えがありません。他者の気持ちに気付き、状況に気付きながら、時にかなう在り方の実現が出来たらよいと思います。

まず人を訪問する際には「会いたい」という気持ちが大切です。義務で行くのではありません。そして目の前にいる人に「まなざし」を向け、「寄り添い」人として共に在ることが大切です。そして双方にとって「よかった」と感じられる時を過ごせたらよいと思います。

具体的には、話し手の現実を事実として受け取り、話し手の言葉のうしろにある「気持ち」や「状況」に耳を傾け、伝わってくる「体験の意味」をその方と二人で眺めてみます。出来事と距離をとって、共に眺めると、新しい意味が見出されることもあるのです。

他者を本当に「わかる」ことはとても難しいことですが、私は「わかろうとする」気持ちが大事だと思っています。事

柄や気持ちをそのままわかってもらうことはなくとも「わかろうとする姿勢」を感じるプロセスがあるなら、私の中の何かが「わかってもらえたような」気持ちになることがあるのです。「私は一人ではない」と感じられるなら、根拠がなくても「大丈夫」と思えるのかもしれません。

「聴く」ということは、人と出会い、つながることではないでしょうか。人とつながることは、つながりの中で「互いに生かされている」ということを感じられること、つまり、「いのち」のつながりの実感なのです。

問われる存在として

この講座で私は自分が出来ていることを皆さんに伝えているのではありません。私は「こうすればよい」という答えなどない中で度々悩み、「どうしたら良いのですか？　教えてください」とイエスに祈りたくなります。しかし同時に「あなたはどうする？」とイエスに問われているのを感じるのです。私はそのイエスの問いに応えて行けば良いのだと自分に言い聞かせます。どうしたらよいかと悩みながらも、ともかく他者にまなざしを向け、関わってみようと試みてみる、その繰り返しが私を歩ませてくれるのです。

『ワークを通して』

まず、一人ひとり、自分と向き合い、クレパスと、いろいろな言葉が書かれたシールで、「私」を表現する「私マップ」を作成しました。他人から思われている私はどんな人か、あるいは他人には見せていないけれど、私にはこんなところがある等、思い巡らす作業を通して、自分自身の物語を作りました。

次に、二人一組になって、お互いの「私マップ」について、できるだけ率直に話してみる。そして、お互いに丁寧に聴く、というワークを行いました。このワークでは、「聴く」という実践のために、相手のトーンに合わせ、相手の気持ちの表現を繰り返す等に注意しながら、相手の話を聴き、相手の気持ちを大切に受け取ることを学びました。

当講座のチラシを見て、「どんなワークをさせられるのか」と不安を抱えて受講された方もおられましたが、ワークでは、どのグループも話が弾み、熱心に聴き合い、楽しく学習できた様子でした。「聴く」ということは、「自分が相手を生かす」というより、互いに寄り添い合いながら「互いに生かされること」という講話の内容を確認するひと時になったのではないでしょうか。

福音宣教企画室

「望洋庵」の今

西陣教会の脇道を、少し奥へと進むと「望洋庵」と書かれた築100年を越す日本家屋が見えてきます。

戸を開けると、玄関には靴がいっぱいで足の踏み場もありません。青年たちが集い「青年のための聖書入門講座」が開かれているようです。

2012年、高松教区の名誉司教であった溝部司教様が、ここ京都に来られ開かれた望洋庵。「一緒に聖書を読み、教会の祈りをとなえ、沈黙を大切にし、個人面談をすることで黙想を進めていく方法をとっています。こうして一人ひとりの青年が、教会に生きる者として目覚めてきます。こうした地味な仕事が、将来の教会をつくっていくことでしょう。（望洋庵だよりvol.2巻頭言より抜粋）」

溝部司教様は徹底してこのように過ごし、今年の2月末に帰天されるその時まで、この仕事をやり通してくださいました。

そして今、ずっとともに歩んでくださった大塚司教様、京都教区の神父様、全国に広がる望洋庵の支援の会の人たちに支えられ、かつてと変わらずに聖書を開き、学び、分かち合う若者たちが望洋庵に集っています。

「青年のための聖書講座」にはいつも20名近い青年が集い、また黙想会では「キリスト者として社会で生きること」を模索する全国の若者が、庵の静かな時間をすごしています。望洋庵での時間を過ごし、家路へとつく青年たちの笑顔が、教会の未来を照らす光となればと希望しています。最近では、青年のためだけではなく、広く大人の方々にも門戸を開く「はじめての黙想会」も始まり、イエス様との出会いを提供しています。

※望洋庵では、種々の活動を行っており、HPやFace bookなどで情報を発信しています。青年や中高生の黙想会、研修会をすることもできますので、ご相談ください。

望洋庵運営委員会

京都済州姉妹教区交流委員会

2016年度、9月までの交流についてご報告します。

5月　済州教区「聖母の夜」行事参加と聖地巡礼

済州教区の「聖母の夜」行事参加と聖

地巡礼を、5月19日～21日の2泊3日で、鶴山進栄神父を団長に、ブ・ヨンホ神父の案内にて、信徒17名の参加で行いました。

鶴山進栄神父

京都教区と済州教区が姉妹教区になって11年目になります。これまでに教区間でさまざまな交流の機会がありました。それはとても意義深いものです。

今回、この巡礼を通じて、神という共通の父をいただいていることを体験し、互いに知り合い、親しくなることに、大きな意味があると思います。

そして、風光明媚な済州（チェジュ）島の風景とおいしい食事を楽しむこともできました。

キム・ギリャン教会のミサに参加した際、平日にもかかわらず30人もの子供たちが、ミサに参加している活気のある教会の様子に、驚きとともに、うらやましさも感じました。その後、食事の席を用意していただき、温かい歓迎をうけたことに感謝申し上げます。そして、巡礼に参加された皆様も、共通して感じた思いであると、確信しております。

長岡教会　早川康哉

「聖母の夜」のミサは夜9時頃から「恵みの丘」で行われました。聞いていた通り、とても寒かったです。しかし、ミサは、信徒の方約3000名、また、司教様や神父様が約50名と盛大なもので、聖歌隊の歌声の迫力と美しさに驚きと満足感に浸ることができ、寒さも忘れてしまいそうでした。

ロザリオの祈りが始まると、祈りと行列の流れが人間大洪水のごとく大迫力で、流れに付いて歩くのが必死の思いでした。

ローソクを持った白い服を着た信徒の婦人の方が、道しるべのようにおられ、聖霊のように思われ、癒されるのを感じました。

いままで経験したことのない迫力ある済州でのミサに参加でき幸せでした。

宇治教会　坂本多恵子

おや、月の明かりの向こうに大きな池が見えます。そして池に沿って白いものが点在しています。何？　目を凝らすと純白のチマチョゴリの女性が、手に電灯とロザリオを持って祈っておられました。美しいです。池の周りはロザリオの珠の数だけ植樹されていて、その植樹ごとに白衣の女性が立っておられ、道を照らして下さっています。寒風の中で待機して下さる、スケールの大きい演出と思いやりに感動です。

長岡教会　吉田美智代

「聖母の夜」のミサの前に韓国最初の殉教者となる金耆良（キム・ギリャン）殉教150周年を追悼して演じられたオペラは、緊迫感が漂い、素晴らしく、衝撃的な舞台でした。このオペラも姜（カン）司教様のお説教も、ブ神父様がレシーバーを準備し、同時通訳をして下さったことに感動し、感謝しました。

行列が終わり、施設の前まで帰って来ると、正装姿の司教様が記念撮影のために、私たちを待って居て下さったのです。真夜中も過ぎたこのような時間帯に、恐縮しました。姜司教様本当に有難うございました。

長岡教会　太田みどり

済州島は美しい島です。現地の皆さんは、島の中央にそびえたつ済州の象徴ハルラ山をプッシュなさるのですが、私としては、済州のいたるところで畑や牧場の中にポコンと盛り上がっている「オルム」とよばれる小さな山のほうが、美しく思えます。「オルム」は側火山、つまり主な火山の周りにできる小さな火山です。側火山自体は日本にもたくさんあって珍しいものではないのですが、済州島では、おそらく耕地が足りないため、側火山のふもとぎりぎりまで田畑を作っており、高いところから見ると田畑や牧場の中に側火山「オルム」がお椀を伏せたようにポコンと盛り上がって見えるのです。その様子は特異でもあり愛らしくもありました。

キム・ギリャン教会の信徒の皆さんが私たちを歓待してくださったことに心が温まりました。「絶対に一番おいしいものを食べてもらう。絶対におなか一杯になってもらう。絶対に笑顔で帰ってもらう。」というのが韓国式おもてなし。以前済州の信徒の皆さんが私たちの教会にいらしたことがありますが、私たちのおもてなしはさぞ寂しく感じられたのではないかと思います。私たちには韓国式おもてなしはできませんが、せめて「皆さんの心を温めたい」という気持ちが通じるおもてなしができたらと思いました。

福岡久留米教会　森　智子

今回の巡礼では、済州教区の皆様の信仰に対する熱い思いとパワーを感じることができました。特に、キム・ギリャン教会で、平日の夜だというのに子供たちがたくさんミサに与り、その後、生き生きとした笑顔で勉強している姿には、韓国カトリック教会の明るい未来を見たような気がしました。

6月　京都・済州姉妹教区交流月間
ヤン・ヨアン神父、キム・ヨンテ神父、来訪

6月24日～30日まで、済州教区のヤン・ヨアン神父（ヨンドン教会）、キム・ヨンテ神父（ノヒョン教会）が来訪され、6月26日（日）、大塚司教の霊名の祝い日に、共同司式でミサを捧げて下さいま

した。

滞在中、高槻教会での高山右近の史跡訪問、神戸たかとり教会と淡路大震災メモリアル公園の訪問、韓国とは異なる温泉も楽しんで頂きました。

また、京都コリアンカトリックセンターでのサランバン（ミサと会食の集い）では、ブ神父、チェ神父、キム神父とともに5人の韓国の神父様の共同司式のミサが行われ、その後の食事会も好評で、5人の神父様による韓国の歌の合唱も披露して下さいました。

9月のお知らせ

教　区

典礼委員会／Tel.075(211)3025 ㊊㊌㊍
典礼研修会
日　時：24日㊏ 14:00〜15:30
テーマ：ミサにおける聖歌奉仕と実践
講　師：小立花 忠師
対　象：典礼部、典礼奉仕者
会　場：カトリック西陣教会聖堂
（申込み不要、参加費不要）

聖書委員会／Tel.075(211)3484 ㊊㊌㊍
聖書講座「神の正義と神のいつくしみ」
日　時：14日㊌ 19:00 15日㊍ 10:30
テーマ：イエスのたとえ話①
講　師：白浜 満被選司教(広島教区)
日　時：28日㊌ 19:00 29日㊍ 10:30
テーマ：イエスのたとえ話②
講　師：奥村 豊師
会　場：河原町教会 ヴィリオンホール
よく分かる聖書の学び(ヨハネ福音書を読む)
日　時：7日㊌ 10:30
講　師：北村 善朗師/参加費：300円
会　場：河原町教会 ヴィリオンホール

信仰教育委員会
青年のための黙想会
日　時：10月8日㊏ 19:00〜9日㊐ 16:00
場　所：望洋庵
講　師：北村 善朗師
対　象：青年男女／参加費：2,500円
申込要：FAX.075(211)4345
締　切：26日㊊

福音宣教企画室／Tel.075(229)6800
病者・高齢者訪問講座
第3回「死者のための祈り－復活の希望の中で－」
日　時：8日㊍ 14:00
講　師：一場 修師(マリスト会)
会　場：カトリック会館6階
受講費：300円

修道会

男子カルメル修道会(宇治修道院)
Tel.0774(32)7016 Fax.(32)7457
キリスト教霊的同伴(松田 浩一師)
日　時：2日㊎ 20:00〜3日㊏ 15:00
参加費：6,500円
一般のための黙想(中川 博道師)
日　時：10日㊏ 10:00〜11日㊐ 16:00
テーマ：人生の実りを思い巡らす
参加費：6,500円
水曜黙想(松田 浩一師)
日　時：21日㊌ 10:00〜16:00
テーマ：神のいつくしみと
エデイット・シュタイン
参加費：3,000円
聖テレーズの黙想(伊従信子氏)
日　時：30日㊎ 17:00〜1日㊏ 16:00
参加費：6,500円

諸団体

望洋庵／Tel.075(366)8337
Eメール bouyouan.seinen@gmail.com
黙想会
「いつくしみの特別聖年」の
「いつくしみ」ってナンダ?!
日　時：3日㊏ 15:00〜4日㊐ 14:00
同　伴：北村 善朗師・大塚 乾隆助祭
対　象：青年男女／参加費：2,500円
青年のための聖書入門講座
日　時：15日㊍ 19:00 29日㊍ 19:00
テーマ：講座の次の主日の福音箇所
対　象：青年男女(初めての方歓迎)
参加費：200円(申込不要)

京都カトリック混声合唱団
練　習：11日㊐ 14:00／24日㊏ 18:00 ミサ奉仕後
カトリック会館6階

コーロ・チェレステ(女声コーラス)
練　習：8日㊍ 10:00／29日㊍ 10:00
カトリック会館6階

聴覚障がい者の会(どなたでも参加可)
手話表現学習会(聖書と典礼)
日　時：8日㊍ 13:00〜15:00
会　場：カトリック会館6階
黙想会
日　時：22日㊍ 11:00〜14:00／場所：桂教会
指　導：小立花 忠師／参加費：700円(昼食代)
申込要：Tel・Fax.075(723)1135 傳(つとう) 裕子

心のともしび 番組案内
テレビ(衛星.CATV)スカイAスポーツプラス
毎週土曜日 朝7:45
シリーズ「小さな気づきを大切に」
出演は阿南 孝也氏(洛星中学高等学校 校長)
ラジオ(KBS京都) ㊊〜㊎ 朝5:55
㊏ 朝5:15
9月のテーマ「年を重ねる」

※11月号の原稿締切り日は9月28日㊌です。

大塚司教の 9月のスケジュール

Schedule of Bishop Otsuka

1日㊍ 10:00 中央協 常任司教委員会
15:00 日本カトリック神学院 常任司教委員会
4日㊐ 10:30 故 村上眞理雄神父 一年祭 追悼ミサ（河原町）
11日㊐ 10:45 三重南部ブロック司教訪問（久居）
15:00 久居教会・ポルトガル語ミサ
13日㊋ 15:00 青少年委員会
15日㊍ 13:30 カテキスタのための聖年「15:00 司教ミサ」（河原町）
18日㊐ 10:00 京都北部ブロック司教訪問（丹後教会・加悦教会堂）
19日㊊ 13:30 白浜満被選司教 叙階式（広島司教区司教座聖堂）
20日㊋ 14:00 福音宣教企画室 会議
21日㊌ 13:30 聖愛幼稚園 説明会（司教館）
25日㊐ 11:00 長岡教会 創立50周年 ミサ
26日㊊-27日㊋ 大阪教会管区司教団 会議
29日㊍ 14:00 司教顧問会

2016年ＹＥＳ

河原町教会　**橋本　仁子**

皆さんこんにちは。
この４月で、センターの事務員を引退しました。今後はのんびり活動に参加しようと思っている、河原町教会の橋本仁子です。
今回は、青年センターが毎年行っている YES について記事を書かせていただきます。
今年の YES についての内容などの記事は今後、案内がありますので、楽しみにしてください。
さて、まず YES とは何かを、ご説明いたします。毎年秋に行われている、京都教区の青年の集い「YES」。

YES とは
Ｙ：Youth（**若者**）
Ｅ：Encounter（**出会い**）
　Enjoy（**楽しむ**）
　Exchange（**交流**）
Ｓ：Space（**場所**）

の略で、基本的には京都教区の青年が、一年に一度、気楽に集まろうということで計画されました。2002年から行われており、今回は15回目となります。
例年沢山の参加者が集まってくださり、近年では他教区からの参加者に加え、昨年はなんと、姉妹教区であるチェジュ教区の青年達も参加してくれました。
毎年、分かち合いやレクリエーションを通して信仰や友好を深め、神様のお恵みのもとに、とても幸せな時間を過ごす事ができているなーと感じます。
今年もまた11月に向けて、実行委員会が動き出しました。
今年はどんな内容になるのか、スタッフの私自身もワクワクしながら進めています。
詳しい情報は、決まり次第青年センターのホームページなどに掲載される予定なので、こまめにチェックしてみて下さいね。
沢山の青年のご参加を、お待ちしております。

〔青年センターHP〕 携帯からでもご覧いただけます。 http://www.kyoto.catholic.jp/seinen/

青年センターあんてな